

文化が拓く地域の未来 ～新しい視点と自治体の役割～

一般社団法人人文知応援フォーラム プログラムコーディネーター 小島 多恵子

I はじめに

本稿で紹介する地域の文化活動あるいは文化を核としたまちづくりの事例は、すべて公益財団法人サントリー文化財団が1979年から顕彰しているサントリー地域文化賞受賞者のものである。

筆者は37年間、同賞の顕彰事業と地域文化の調査・研究に携わってきた。その間に200件以上の地域文化活動の現場を訪ねた。そして実感したのが、日本の地域文化の豊かさと多彩さ、その質の高さである。

日本には、約30万団体という驚くべき数の伝統文化、世界でも類をみない数と言われる6～7万の合唱団、約3千の劇団、約千のオーケストラ、50以上のオペラの団体があり、近年急増したアートフェスティバルは全国200か所以上で開催されている。日本古来の文化のみならず、明治以降に伝わった欧米さらには世界各地の芸術・文化、現代芸術や地域から生まれた新しい文化もある。おそらく世界一多彩で、国際コンクールで優勝する団体も多数あり、レベルも高い。

これらのほとんどが、いわゆるアマチュアによるもので、好きなことのために、お金も時間も労力も惜しまずに注ぎ込む。賞の創設時から長年、サントリー地域文化賞の選考委員を務め、育ての親である文化人類学者の梅棹忠夫氏は、あるとき、受賞者の皆さんにこう言われた。「皆さん、一文の得にもならんあほらしいことを、ようこれだけ一生懸命されると感心します。でも、それがほんまの文化です」と。

また、ここには日本人特有の心情が働いているようにも感じている。カラオケを生み出した日本

人は、文化・芸術は鑑賞するだけでなく自分でやってみたいのだ。よそのまちでやっている盆踊りや祭りを自分たちのまちでもやりたい。地方巡業の歌舞伎や人形芝居を観ると、自分たちで演じたい。文化のカラオケ化が、江戸時代から今日まで続いているのではないだろうか。

II 日本の地域文化の概要

サントリー地域文化賞は、地域文化の発展に貢献した個人・団体をこれまでに250件顕彰している。受賞者の特徴をみると、まず、地域的には城下町、宿場町、門前町などの歴史のあるまちに多い。これらのまちはかつて、商工業で栄え、流入人口も多かった。また、人口30万人以下の市町村が多く、新興住宅地と大都市圏は少ない。職住が接近している方が、余暇に文化活動に勤しむ時間的余裕があり、また古くから住んでいる人、顔見知り同士が多く、参加・協力を得やすいということが関係するのではないだろうか。

活動のリーダーは、自営業者がもっとも多く、続いて教師、お坊さんが多い。今の学校の先生たちは多忙を極めているが、総じて、自由に使える時間が多く、地域の人たちとの接点が多い人たちといえるだろう。地域文化活動のリーダーたちの中から、市町村議会、都道府県議会、さらには国会の議員になった人が数多く、首長になった人も少なくない。

1) 伝統文化と現代

続いて地域に根付いた文化活動の具体的な事例を紹介する。

高知県仁淀川町で行われている「秋葉祭り」では、標高1,000メートルを超える限界集落に毎年、



小島 多恵子（こじま たえこ）

一般社団法人人文知応援フォーラムプログラムコーディネーター

大阪大学文学部美学科卒。1983年公益財団法人サントリー文化財団のプロパー職員として、サントリー地域文化賞の顕彰と地域文化活動の調査・研究に携わる。地域文化に関する講演・講義、シンポジウムのパネリスト、コーディネーターなども多数務める。

2020年6月、サントリー文化財団を退職し、2022年まで同財団特任研究フェロー。2020年10月より現職。

著書に、『ふるさとをつくる ―アマチュア文化最前線』（2014年筑摩書房）、『文化が地域をつくる』（山崎正和編、1993年学陽書房）、『「地元」の文化力 ―地域の未来のつくり方』（荻谷剛彦編、2014年河出書房新社）。

1万人以上の観客が集まる。今から200年余り昔に始まったとされる祭りは、1960年代から、他地区の子どもたちを祭りに「雇う」ようになった。子どもが重要な役割を担うのだが、すでにこの時期から人口の流出と少子高齢化が進み、苦渋の決断として、人口が多い隣町の小学校に頼み、児童に参加してもらうことにした。神事に氏子以外のよそものを入れることには大きな反発があったが、祭りを守るためだと説得した。

祭りを行う別枝地区の実質人口は数十人にも満たないが、祭り当日は総勢200人余りの行列が山道を練り歩く。祭りのために帰ってきたこの町の出身者や親族、そしてよその地区の子どもたちやその親たち、成人した子どもたちである。

秋葉祭り保存会会長（当時）の吉岡郷継氏は、あるとき、こうおっしゃった。「自分たちがこの祭りを守っていると思っていたが、この祭りがなかったら、この地区は誰も住む人がいない、ただの山の中になっていた。祭りが地域を守ってくれていたのです」と。

秋葉祭り



撮影：桑田瑞穂

沖縄県沖縄市に本部がある「琉球國祭り太鼓」は、1982年に設立された創作エイサーの草分けである。伝統的なエイサーを大胆にアレンジし、迫力のある大太鼓を中心として、ロックやポップスも取り入れた。地域に関係なく、それまで認められていなかった女性の参加も認めたため、多くの若者たちをひきつけた。県内のみならず、日本全国、海外でも公演し、現在では日本国内51支部、8か国に海外30支部、計2,500人のメンバーを擁する団体に成長した。

当初、あんなものはエイサーではないとさげすまれていたが、同団体の人気にあやかり、下火になりかけていた伝統的なエイサーも活気づいた。また、現在は200以上の創作エイサーの団体が活動している。

伝統文化は変えてはいけない、という意識が広く浸透している。思うにこれは1975年に文化財保護法が改正され、無形文化財が保護の対象となったことに端を発している。1990年くらいまでは、文化財指定の対象となるのは、古くからの形を伝え残しているものとされ、明治以降に変更を加えたものは、文化財指定を受けられなかった。当時の文化庁、お上の方針である。昔のまま守り伝えることが大事なのだ、変えてはいけないのだという意識が、指定を受けた側にも、受けられなかった側にも残ったのではないだろうか。

だが、本当にそうだろうか。琉球國祭り太鼓の創始者、目取真武男氏は言う。「今の伝統エイサーも、始まったときは創作だったのです」と。

高知県の秋葉祭りは、神輿、毛槍投げ、子どもによる太刀踊り、天狗、狐、ひょっとこの踊りなど、さまざまな祭りの要素がふんだんに盛り込ま

れている。それぞれの時代に、自分たちが面白いと思ったものを次々に取り入れていった結果だと思われる。

そもそも、全くオリジナルな伝統文化は、全国でも数少ない。どこからか伝わってきて、その土地に定着し、そこでその土地の歴史や文化、風土や住民の気質にあわせて変化を遂げてきたものばかりだ。常に時代の好みや実情に合わせて自己変革を遂げてきた文化が生き残ってきたのだと言える。

2) 越境する文化

前項で伝統文化の多くはよそから伝わってきたものだと述べたが、現代ではより遠くから文化が伝播している。

福島県川俣町では、日本最大のフォルクローレの祭典「コスキン・エン・ハポン」が1975年から開催されている。3日間にわたり、全国から集まったプロとアマチュア160組、約400人がフォルクローレを演奏している。

始まりは、たった一人のフォルクローレ愛好家からだった。長沼康光氏は、昭和20年代にラジオでふと耳にしたフォルクローレに感動し、地元で仲間を募って演奏を始めるとともに、関東の愛好家たちとも交流。その中で、フォルクローレの本場アルゼンチンのコスキン市で開催されている「コスキン・フェスティバル」のような祭典を、川俣市でやろうという話が持ち上がり、実現してしまったのだ。

当初の出演者は十数組。だが、1980年頃から、長沼氏が近所の子どもたちへの無料ケーナ教室を始め、子どもたちが出演するようになると様相が変わり始めた。保護者がイベントを手伝い始め、遠来の出演者たちを温かくもてなす。それに感動した人たちの口伝で、参加者がどんどん増え始めた。

1997年からは小学校の正規の授業で、フォルクローレで用いられる竹笛、ケーナを指導。川俣町は「ケーナの響く里づくり」の取り組みを始めた。また、1999年からは町民1,500人が参加するコスキン・パレードが始まる。フォルクローレを演奏しない一般の町民たちが、中南米の民族衣装を身にまとい、踊り、パレードするという、町ぐるみのイベントに成長したのだ。

しかし、2011年、原発事故により町内の一部が

避難地区に指定された。町の中心部に避難してきた人たちを助けてほしいと、高齢の長沼氏に代わって事務局を担っていた斎藤寛幸氏が、関東学生フォルクローレ交流会にメールを送った。するとそのメールは瞬く間に多くの人たちに転送され、全国から励ましの手紙や義援金が届いた。斎藤さんは、「毎日発表される放射線量におびえ、折れそうになる心を、全国の音楽仲間が励ましてくれた。音楽が町を支えてくれた」と話してくれた。

北海道札幌市で1992年から毎年6月に開催されている「YOSAKOIソーラン祭り」も、地域とは全く関係のない祭りだ。高知のよさこい祭りをたまたま目にして感動した大学生たちが、「街は舞台だ!」をキャッチフレーズにして始めた。鳴子を手にして踊ること、「ソーラン、ソーラン」の1フレーズを入れることというルール以外、楽曲も振付も衣装も全く自由。地域に関係なく、どこチームに入っても、やめてもいい。幼児から高齢者まで参加できる、新しい祭りだ。

第1回は10チーム1,000人が札幌大通りで演舞を披露した。そして、2025年には270チーム、2万7千人が道内外から参加する大イベントに成長。観客動員数200万人以上、経済効果も200億円を超えるといわれる。さらに、全国200か所以上でよさこい系のイベントが開催されている。

優れた文化には波及力がある。よその土地の文化に感動した人たちが、自分たちもやってみたく、各地で同時多発的に活動を始めるのは、日本人ならではの特性によるものかもしれない。最初は単なる物まねであっても、よその文化を心から愛し、真剣に取り組む人たちがいれば、その文化がレベルアップして、地域の人たちにも愛され定着し、継続していくうちに地域の風土にあった独自性が生まれるのは、伝統文化も新しい文化も全く同じなのだ。

3) 子どもやお年寄りと地域文化

沖縄県うるま市で、2000年から上演されている現代版組踊「肝高の阿麻和利」は、沖縄の伝統芸能「組踊」をベースに、中高生が演じるミュージカルである。これまでに360回以上公演し、20万人以上の観客を動員している。

始まりは、子どもたちの居場所づくりを目的に、旧勝連町教育長の発案によるものである。しかし

3年目に町からの補助金が切れ、「頑張っている子どもたちに、大人の都合で続けられないとは言えない」と考えた保護者たちが主催、自主運営するようになった。

成長した子どもたちの中からは、プロの演出家、俳優、ミュージシャン、衣装デザイナーも誕生。泡盛「阿麻和利伝説」、「AMAWARI HOTEL」など、地域に新しい産業も生まれ、収益の一部を公演に寄付している。

沖縄県竹富町の小浜島で1993年に活動を開始した「小浜島ばあちゃん合唱団」は、老人福祉センターのレクリエーションから生まれた。入団資格はなんと80歳以上。だが、隣の石垣島、沖縄本島のみならず、大阪、東京、北海道、さらには海外公演も行い、レコードデビューまで果たすというお達者ぶりである。

公演は入場無料で、毎回300人以上が集まり満席となる。観客のほとんどが血縁者で楽屋見舞いとして少なからぬ金額を置いていき、それが活動資金となっている。老人ホームへの慰問公演も積極的に行っており、同じお年寄りが頑張っている姿に勇気もらえるという。

子どもやお年寄りには係累が多い。両親や祖母、子や孫たちが観客あるいはサポーターとして活動を支えている。社会的弱者である子どもやお年寄りを地域が支え、彼らの活躍と笑顔によって、地域にも活力が生まれているのだ。

Ⅲ 地域文化と行政

続いて、地域文化と行政の関わりについて述べてみたい。1970年代まで、文化は重要な行政課題とはみなされていなかった。潮目が変わったのは、1975年の文化財保護法の改正だと考えている。

文化財保護法が改正され、民俗芸能や祭りなどの無形文化が文化財指定を受けられるようになったことはすでに述べた。国や県から文化財指定を受けると、地域の自治体に保存の義務が課せられ、多くの自治体の教育委員会内に保存会事務局が置かれた。それまで縁がなかった神事や芸能に行政が積極的に関わる契機となった。

さらに1976年から文化庁が重要伝統的建造物群保存地区を選定。それまで単体の建物のみが指定されていたものが、町並みぐるみで保存指定を受

けることになり、町並み保存運動が各地で巻き起こった。

1) 公立ホールと地域文化

もうひとつ注目されるのが、1970年代の行政による多目的ホールブームである。一部では「無目的ホール」「税金の無駄遣い」と批判する声もあったが、練習場所が生まれたことで、全国のアマチュア合唱団、劇団、オーケストラの数が飛躍的に増加したことも事実である。また、ホール誕生によって新しい地域文化も各地で生まれている。

岩手県遠野市で1974年から上演されている「遠野物語ファンタジー」は市民センターの誕生を契機としている。せっかくできたホールを活用しようと、市と市民実行委員会が開催。脚本、演出、出演者、音楽、芸能、大道具・小道具などすべて市民による手作り演劇であり、その後、全国に広がった市民参加型演劇の先駆けである。

柳田國男の『遠野物語』で知られる地元の民話や伝説を題材に、小学生からお年寄りまで総勢200名以上が参加。市民のための脚本教室やバレエ教室も市が開催している。これまでに延べ16,882人がスタッフ・キャストとして参加し、入場者数は105,146人に達している。

富山県南砺市で1991年から開催されている「スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド」も旧福野町立文化センターの誕生を契機とする。市民有志の実行委員会と町の共催で始まったワールドミュージックの祭典である。

海外から招いたミュージシャンが町に長期滞在してワークショップを開催し、スティールドラムやジャンベなどを演奏する多くの市民楽団が誕生

市民楽団TU-MARACCA



写真提供：スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド実行委員会

している。会期中は、音楽だけではなく衣食住を通じた異文化交流、異文化理解のためのイベントも開催され、3日間で1万人以上の観客が集まる。

2) 文化行政バブル（1988年～2001年）

実際のバブル経済より少し遅れて、自治体の文化行政バブルが始まり、少し長く、2001年頃までそれは続いたと考えている。始まりは、1988年のふるさと創生1億円。すべての自治体に1億円がばらまかれ、地域文化の発展のために使った自治体が多数あった。またこの頃、都道府県、市町村立の文化ホール、博物館、美術館の建設ラッシュが生じている。

さらに、数百人から千人を超えるボランティア・スタッフを擁し、自治体が1千万円以上の補助金を支出する大型の文化イベントも誕生している。長野県飯田市で開催されている「いいだ人形劇フェスタ」もそのひとつだ。始まりはバブルのはるか以前の1979年。日本人形劇連盟が、全国の人形劇人が集まってお祭りを開ける場所として飯田市に協力を要請し、市が受け入れたことによる。

当初は、人形劇人のお祭りであり、参加者は全員自費で参加し、市民に人形劇をみてもらうというものであった。だが、飯田の市民が彼らを温かく迎え、もてなし、自分たちの地区でも公演してほしいと招くようになる。感激した人形劇人の口コミで参加者は増え続け、現在では夏の4日間、約100会場で300公演以上が行われ、延べ3万人の観客が人形劇を楽しんでいる。

飛躍の年となったのが、1988年である。市が人形劇専用劇場を建設し、10周年を記念して32か国から300人以上の人形劇人を招いて「世界人形劇フェスティバル」を開催した。このときに大勢の市民がボランティア・スタッフとして活躍し、今も千人以上のボランティアがイベントを支えている。

3) 文化行政のバブル崩壊

バブル経済が崩壊し、国からの補助金が減り続ける中、文化行政のバブル崩壊の決定打となったのが、2001年の小泉改革による財政引き締めと交付税カットであろう。財政が厳しくなった自治体の多くが文化予算を削る。さらに、合併特例債が2005年に期限を迎え、多くの自治体が市町村合併に踏み切ったことが追い打ちをかける。わが町自慢の文化として大切にされていたものが、広域合

併により地域文化のひとつとして扱われ、予算がカットされた。

1990年代以降に顕著になった少子高齢化と地方の人口減少の加速も加わり、地域文化は冬の時代を迎えた。

4) カリスマ行政マンの活躍

では、どうすればいいのか。もちろん、簡単に答えが出せる問題ではないが、かつて、カリスマ行政マンと呼ばれる人たちがいたということを紹介したい。1970年代から80年代、東京一極集中が加速する中、地方で危機感を抱いた人たちが立ち上がり、自分たちのまちを守るために立ち向かった。

愛媛県内子町の役場職員だった岡田文淑氏は、1970年代から盛り上がり始めた町並み保存のために尽力し、1982年、町の一画が重要伝統的建造物群保存地区に指定される。住民たちが民家や商家をリフォームするのを手助けし、町が歌舞伎座や豪商の住宅を修復したおかげで、内子町は観光地として脚光を浴びた。

さらには、全国でも初めて、独自の村並み保存運動を展開し、1994年には町営の民宿「石畳の宿」もオープンした。

愛知県豊田市の旧足助町役場の職員だった小沢庄一氏も、1970年代に町並み保存運動に関わり、1980年には山里の暮らしの知恵を紹介する「三州足助屋敷」を設立。炭焼き、機織り、笠張りなどの技を伝えるお年寄りを集めて実演販売を行い、今も観光客でにぎわっている。

さらに1990年に完成した老人福祉センターを活用した複合施設「百年草」は、ホテル、温泉、レストラン、ハムづくり工房、パンづくり工房を併設している。

他にも1980年代には各地でカリスマ行政マンと呼ばれる人たちが活躍して名を馳せていたが、彼らは1970年代、30歳代の頃から自費で各地を訪ね歩き、お互いに知り合いの仲だった。ちょうど幕末の志士たちが、自藩と日本の現状を憂い、各地の同志たちと結びついていったように。

岡田氏がかつて、「この頃、毎日のように視察の人たちがやってくるが、ほとんどが3人組じゃ。一人ずつ別のところに行って、後で情報を交換すればいいものを、無駄なことをするもんじゃ」と語っ

た。

5) プロフェッショナル行政マンの誕生

だが、現代の行政マンにとっては、休みの度ごとに自費で先進事例を訪ね歩き、次々に企画を提案し、実現させていくのは至難の業だろう。岡田氏も小沢氏も、出る杭は打たれるのこわり通り、一度は左遷の憂き目にあい、そこから復活し、返り咲いているのだが。

一方で、近年にはいって、地域文化の世界で30年以上にわたり地域文化振興に携わるプロフェッショナルな行政マンも誕生している。

広島県安芸高田市では、1995年から「神楽の里づくり」に取り組んでいる。同年、2,000人収容の全国唯一の神楽専用施設「神楽ドーム」が完成。1998年には温泉、飲食、神楽を楽しめる宿泊施設「神楽門前湯治村」をオープンし、ここでの収益で神楽ドームを支えている。ドームでは、2004年から広島・島根の神楽団を選抜して行う「神楽グランプリ」、2011年から全国の高校生による「神楽甲子園」を開催。大阪や海外などでの公演、阿波踊りとのコラボなどにも取り組んでいる。

大阪府能勢町では、1993年に町立の「浄るりシアター」が開館。もともとこの地では語りだけの素浄瑠璃が盛んだったが、人形芝居は行われていなかった。そこで、1998年、住民による「ザ・能勢人形浄瑠璃」がスタートし、のちに、劇団として発展させた「能勢人形浄瑠璃鹿角座」が誕生。1992年から後継者養成のために「こども浄瑠璃」を開始し、2006年3月、能勢町が「浄瑠璃の里文化振興条例」を制定した。

安芸高田市の松田祐生氏、能勢町の松田正弘氏は、これらの活動に30年近く携わるプロフェッショナルだ。数年ごとの異動が当然の行政にあって異例ともいえる。だが、余人に代えがたい知識、ネットワーク、情熱の持ち主であることは周囲も異論の余地がなく、行政のトップが交代しても、彼らを外すことはなかった。他の地域でも、本人の熱意や技量によって、長く地域の文化振興に尽力している人は数多く、彼らの活躍によって地域文化が大きく進展している。だが、本人の熱意や技量だけでなく、そういう人を抜擢し、プロフェッショナルとして育てる、行政の度量や周囲の応援も必要だと思う。

IV おわりに

地域文化は地域の宝である。文化をコミュニケーション・ツールとして、活動を行う団体内では、年齢や職業、住む地域も異なる人たちが強い絆で結ばれ、他団体や観客との交流も生まれる。活動が活発化し知名度が上がると、それを手伝う人たちや観客も増え、交流人口、関係人口が増える。時に経済波及効果も生まれる。

さらには、自分たちの地域の文化に愛着や誇りを感じるようになると、それを通じて郷土愛も育まれる。2013年にサントリー文化財団が全国の人口30万人以下の市町村に住む3,000人を対象に行ったアンケート調査では、定住者、Uターン者、移住者の中で、地域文化活動に携わっている人の地元への愛着は、そうでない人たちに比べて明らかに高いことが分かった。一方で、地域文化活動をしていない移住者の愛着度は非常に低い。また、高校生までに地域文化活動に参加していた人の地元への定着率が高いことも分かった。

何よりも地域文化活動に参加することで、生き生きと楽しんで暮らす人が増えることが、地域の活性化にとって一番大切なことなのではないだろうか。

だが、先にも述べた通り、地域文化はますます厳しい時代を迎えている。日本全国を覆う構造的な問題が根本にあるために、これを克服するのは非常に困難だと言える。長く続く伝統文化、昭和や令和の時代に誕生した文化も、活動を停止したり休止する例が、近年、特にコロナ禍以降、急激に増えている。

地域の宝である地域文化を守るために、筆者は本誌の読者である自治体職員の皆さんの尽力を期待している。もはや単独の団体、市町村では生き残りが厳しくなっている中、団体や地域の枠組みを外して、広域で連携して支えあうことが重要になっている。その際、提案や仲介を通じて、連携をサポートする役割を行政マンの皆さんに果たしていただきたい。それには、幅広い知識や情報、ネットワークが必要だが、まずは地元の地域文化に関心と愛情を注いでほしいと、切に願っている。